番組

解説　野村　万蔵（和泉流）
　　茂山千三郎（大蔵流）

和泉流
見物左衛門　花見
見物左衛門　野村　萬

大蔵流
萩大名
大名　茂山千五郎

休憩　十五分

素囃子
神舞
大鼓　飯嶋六之佐
小鼓　住駒　俊介

和泉流
髭　櫓
夫　野村　万蔵
妻　炭　哲男
注進の者　清水　宗治
女たち　炭　光太郎
〃　中島　恭介
〃　中尾　史生
〃　山田　譲二
地謡　鍋島　憲
　　能村　祐丞
　　野村　万禄
　　荒井　亮吉
　　小崎　正信

太郎冠者　茂山千三郎
庭の亭主　茂山七五三
太鼓　麦谷　暁夫
笛　吉野　晴夫

解説について

現代の狂言二流派、大蔵流と和泉流より、茂山千五郎家と野村万蔵家の競演をお楽しみください。同じ狂言でも台本や演出、所作、セリフの言い方など、流派によってまた家ごとにも特徴があり、そうした違いを発見しながらご覧いただくのもまた一興。解説では、知っておくと数倍楽しめる豆知識など、茂山千三郎と野村万蔵がわかりやすくお話しします。

あらすじ

見物左衛門　花見 ●けんぶつざえもん はなみ

見物左衛門という男が、地主の桜（京都清水寺の鎮守の神、地主権現の桜のこと。桜の名所）が盛りだというので花見に行く。清水に着くとあちこちで花見の宴が行なわれており、自分も竹筒を開いて酒を飲み小謡などうたって楽しむ。また西山も花盛りだと聞いて出かけ太秦の太子の社に着くと、名花を賞しまた竹筒を開いて謡い、春の花見を存分に楽しむ様子が描かれる。

終始一人で演じる珍しい狂言。同じ曲名で〈深草祭〉を見物に行く筋立てもある。和泉流では、江戸中期に加賀藩主前田重教の名により新作された、いわゆる前田家狂言に見え、野村万蔵家に台本が伝わる。

萩大名 ●はぎだいみょう

長らく在京している田舎大名（シテ）が、退屈のあまり遊山に出かけようと太郎冠者に相談する。冠者は、下京のとある庭に萩が今を盛りと咲いているので、それを見物に行こうと誘う。ところがその庭の持主は大の風流者で、庭を見にきた人には必ず当座（即席）で和歌を詠むこと）を所望する。大名は歌を詠むという嗜みがない。そこで冠者が「七重八重九重とこそ思ひしに十重咲きいづる萩の花かな」という歌を教えるが、これもすぐには覚えられない。さらに冠者は、扇の骨の数で「七重八重」を示し、カンニングの方法を教えておく。二人は安心して出かけ、さうそく庭に通されるが…。

髭　櫓 ●ひげやぐら

大髭をたくわえた男（シテ）が、その髭を見込まれて、宮中の大嘗会で犀の鉾を持つ役（儀式に用いる木製の鉾を持つ役）を仰せつかる。男は大喜びで、妻に衣装をあつらえてくれるように頼むが、妻は、貧乏だから無理だと言い、しまいには、髭があるからいけないのだと非難して髭を剃ってしまえと言い出す。腹を立てた男にさんざんに打ち据えられた妻は、目に物をみせてやろうと捨て台詞を残して去るが、やがて注進の者がやって来て…。

出演者紹介

和泉流

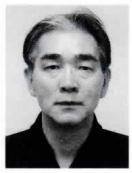
野村　萬 ◆のむら まん

六世野村万蔵の長男。狂言の第一人者として平成九年重要無形文化財個人指定（人間国宝）を受ける。日本芸術院会員。文化功労者。平成五年七世万蔵を襲名し、平成十二年に初世萬となる。公益社団法人日本芸能実演家団体協議会会長、公益社団法人能楽協会理事長。

野村　万蔵 ◆のむら まんぞう

野村萬の次男。平成十七年一月、本家の名跡九世万蔵を襲名。一門の組織萬狂言を率い、国内外で狂言を上演。古典以外にも復曲新作の能や狂言、現代劇にも出演し、また演出も手掛ける。重要無形文化財総合指定。

炭　哲男 ◆すみ てつお



一九五五年生まれ。二世祐丞に師事。一九八七年「奈須与市語」、二〇〇一年「三番叟」を披く。北陸を中心に数多くの舞台を勤めるほか海外公演にも参加。金沢能楽会理事。重要無形文化財総合指定。

大蔵流

茂山千五郎 ◆しげやま せんごろう

四世茂山千作の長男。父および祖父故三世茂山千作に師事。昭和五十一年弟眞吾（現七五三）、従兄弟あきらと「花形狂言会」を結成し、古典狂言のほか、数々の新作狂言に取り組む。平成六年十三世千五郎襲名、当主となる。重要無形文化財総合指定。

茂山　七五三 ◆しげやま しめ

四世茂山千作の次男。父及び祖父故三世茂山千作に師事。平成七年二世七五三を襲名。「花形狂言会」同人。多くの海外公演に積極的に参加する他、新作狂言にも多数出演。重要無形文化財総合指定。

茂山　千三郎 ◆しげやま せんさぶろう

四世茂山千作の三男。父および祖父三世千作、叔父二世千之丞に師事。「花形狂言会」に加わり活動する他、海外公演にも多数参加。他ジャンルの新旧芸術との交流を試み演出家としても活躍。重要無形文化財総合指定。